



## みちくさ言語療法—ことばの発達と障害の臨床より—

### (2) コミュニケーションの学習と脱学習

工藤芳幸

#### 面白き事なきやりとりを面白く

前回、STの仕事について「人どうしが生きていく上で重要なことばやコミュニケーションの困り事について、その解決や解消を手助けする仕事」であり、「その対象や方法についてはいろいろあり、狭義の機能訓練から、コミュニケーション手段や環境の調整、本人や保護者への助言など」と書いた。機能訓練という立ち位置から言えば、STの臨床において、遊びや言語課題などの直接的な働きかけにおいて言語のインプットを質・量ともに十分に与えるということは重要なスキルである。特に語彙学習の方法論として一般的なテキストにも掲載されている（呼び方は様々だが、Focused stimulationともいう）。これはこれで丁寧に取り組んでいく必要がある領域だ。

一方で「コミュニケーションとはどういうものか？」ということに気づいてもらうことが大きなテーマだ。人とのやりとりが今一つ上手くつながらない、楽しめないという子たちもいるからだ。あるいは言葉はたくさん知っているが、コミュニケーションでは上手く使えないという場合も少なくはないからだ。言語臨床においてはコミュニケーションを楽しめるようになることが前

提であり基本的目標であると言って良い。

どんな教材を使うにせよ、何かを「教え込む」のではなく、教材を媒介にしてコミュニケーションを楽しむことに心を砕く。STであるからには自分自身が子どもにコミュニケーションを楽しんでもらえるような、良き話し相手、コミュニケーターであるかどうかということが大事なことなのだ。

そうは言うものの、実のところ私にはそこまでの自信はない。むしろ話し下手で周囲から助けられてコミュニケーションをしているという思いが強い。だから、「ものすごく楽しい！」を演出できているようには思えない。せいぜい私は子どもが面白くないなあと思っていたことをちょっと面白くするとか、なんだか上手くいかないことを少し上手くいくように手助けすとか、そのあたりを目指している。人のお話を聴くことで楽しいことがあるとか、やりとりしてみたら意外に面白いとか、こういう手段を使ったら伝わるとか、ちょっとした気づきを演出できたら良いなと思って仕事を続けているのが正直なところである。楽しいだけでダメでは？という批判があるが、楽しくて張り合いがあるものでなくては広い意味での学習が促されないのではないだろうか。

## コミュニケーションは学習されるもの

発達途上の子どもにとって、コミュニケーションは学習されるものである。大まかには子ども自身の内的な認知・言語能力の発達と子どもが意図的または無意図的に発信した行動を周囲の大人がどのように拾い、返してきたかということが相互に絡み合って学習が実現する。子どもたちはそれぞれが獲得している非言語的な手段や語彙・文形成の力を用いて、周囲とコミュニケーションを取ろうとする。そうやってコミュニケーションをすることによって、コミュニケーションの力を身につけていくものだと思う。

ただし、大人の生きている認識世界や言語システムとは当然ズレが生じるために、大人が思うようには伝わっていないということも往々にしてある。そもそも「通じなさ」があるのが大人と子どものコミュニケーションである。そのズレも含めてコミュニケーションを楽しめると良いのかも知れないが、そんなに単純なことではないことも承知している。そうであれば「話が通じにくい」、「指示が伝わらない」などの相談案件が生じることもないだろう。私自身も子育てや重い障害がある方との関わりで幾度となく袋小路に迷い込んでしまったことがある。通じなさを何とかしようとする手持ちの力で努力した結果、子どもにもあるいは大人にも、社会的に受容されにくいコミュニケーションが学習されてしまうこともある。こうした現象を私は「誤学習」と呼んできた。「子どもが悪い」ように聞こえてしまう言葉かも知れないが、コミュニケーションは双方向のものである以上、こうした「誤学習」は一方の問題に帰することはできず、周囲の人と暮らしてきた歴史の中で形成されたも

のであると捉える必要がある。

## 名前を呼ばれると泣くトオルくん

母親からの相談で出会った3歳の男児トオルくん。まだ言葉が十分に出てはいない。「初語が遅かった」「ことばがゆっくり」「ことばのキャッチボールが難しい」「名前を呼ばれるたびに泣き出す」という相談だった。特に最後の「泣き出す」ということに困っているらしい。初回面接で少し離れた場所にいたトオルくんの名前を呼ぶと、確かに泣く。大泣きする。初めて会った私だけではなく、母親でも日頃関わっている大人が声をかけても同じように泣く。感覚過敏の影響があるのかとも思ったが、それだけではないようだ。対人不安が強くて知らない人に寄っていかないということでもなく、むしろ興味を持って近寄ろうとしている様子があった。しかし、名前を呼んだ途端に泣く。詳しい事情はわからないが、どうやら名前を呼ばれるということが非常にネガティブな感情を引き起こしているように見えた。そこで取り敢えず興味を持った玩具を使って無言で一緒に遊び始めた。少し乗ってきた頃合いで「トオルくん」と呼びかけると、やはり泣いて手が止まった。気にせず淡々と「トオルくん、ほら」と玩具を渡し、遊びを続けてもらおうと泣き止んだ。そのままやりとりしながらまた「トオルくん」と呼ぶと泣き出すが、気にせず遊びを続けていると、3、4回で呼名しても泣き出す様子がなくなった。遊びの場面を離れると、泣きそうになる様子があったが、その初回面接だけに留まり、2回目以降のセッションでは呼ばれて泣くことはなくなった。

恐らくトオルくんは「名前を呼ばれる⇨怒

られる」という学習をしてしまっていたのかも知れない。1回の負の経験が大きく作用してしまったのかも知れないし、指示が伝わらない状況で怒られるということを繰り返していたのかも知れない。少なくとも初回面接での遊びで名前を呼ばれてもいつも悪い状況は起こらないことを理解してくれたようであった。

### 言語発達臨床におけるアンラーン

トオルくんのようなコミュニケーションにおける学習を生じてしまうことは少なくはない。最近、こうした状況への対応を説明するのに、アンラーン (Unlearn) という言葉が合うのではないかという気がしている。この言葉は1年程前に立命館大学の中村正先生から論文指導を受けた際に教わった言葉である。中村先生は対人暴力の研究をする過程で「Violence is learned, It can be unlearned.」という言葉と出会ったそうだ。暴力は学習された問題解決行動である以上、脱学習もできるという意味であり、当時の社会的学習理論に依拠する言葉であるという。アンラーンは学び直しや脱学習と訳すこともできるが、一旦学んだことを解きほぐし、再構築するという意味合いもあって、射程が広い言葉のようだ。ヘレン・ケラーもこの言葉を使っているそうで、彼女は大学で多くのことを学んだが、それを「アンラーン」する必要があったのだという。即ち学んだことを応用していくには、そのままの状態ではなく、自分の中で応用できるように再構築することが必要なのである。

私たちは皆、一旦は親、学校、社会、などそれぞれの生活圏の中で既存の枠組みに則った学習をする必要がある。社会化や文化

化である。しかしながら、成長や発達の過程で新しい課題に直面した時や、新たな社会問題に遭遇した時に、かつて学んできたことだけで対応することが困難な場合がある。また、時には暴力のように社会的に受容されない行為で問題解決することを学んでしまう場合もある。そこでアンラーンという発想が必要になる。

トオルくんは自閉症スペクトラム障害 (ASD) の疑いがある子だった。彼のコミュニケーション行動にも ASD 特性が絡んでいるだろう。しかし、その行動は周囲との相互交渉の過程で身につけた反応の仕方である。アンラーンすることで、これまで互いに気づかず、採用されなかったコミュニケーションの方法を周囲との間で結び直したのだと言えるだろう。

臨床現場では「何をどう教えたら良いのか？」という問いが関係者から投げかけられることが多い。もっと言葉かけをしたらよいのか？どんな教材を与えたら良いのか？といった問いである。こうした問いは幾度となく投げかけられる。他人からだけでなく、自分の中でもこの問いを投げかけている。しかし、何かを足していくという発想だけでは問題が解消しないこともある。既存の問題解決行動の問い直し、その背景にあるシステムの問い直しなど、アンラーンの発想が言語発達臨床にも活かせるのではと思い始めている。

※本文中の事例は複数の事例を再構成したものであり、子どもの名前は仮名である。

〈参考・引用文献〉

景井充・杉野幹人・中村正 (2019) 『“教育から学習への転換”その先へ Unlearning を焦点に大学教育を構想する』文理閣.